

## ジュール・ルヴェルトガ「1877年の琉球諸島紀行」

訳・熊谷謙介

KUMAGAI Kensuke

非文字資料研究センター研究員 神奈川大学国際日本学部教授

日本列島の南端は知られている通り、島や岩礁が絶え間なく鎖のようにつながっており、台湾へと続いている。日本の事情通による信用できる話では、これはマレー系の人々が北上してきた道であり、彼らが日本帝国の基礎を築いたのかもしれない。

1877年5月、フランスの巡洋艦ラクロシュトリ号は、この数珠つなぎの島々と危険に満ちた岩礁を南下し、那覇を守るかのように伸びるサンゴ礁を越え、港に入ろうとしていた。この港は、大琉球あるいは沖縄島と呼ばれる群島の中で最大の島の、主要な港であった。

日本列島は大小さまざまな五十余りの島からなり、空間的にも点在している三つの異なる群島で構成されている。北部地域〔現在の吐噶喇列島〕は、1846年に来訪したセシーユ提督〔Jean-Baptiste Cécille(1787-1873)〕が自らの名をつけた島々だが、すでに完全に日本帝国の一部となっているようである。他の二つの群島、琉球諸島と宮古諸島は17世紀以前から独立国家を形成していたが、1611年に薩摩の藩主が征服を行っている。

琉球王国は昨今の日本の封建制の崩壊〔廃藩置県〕まで、薩摩家の封土となっていた。これ以降、この封土を支配するのはミカドであったが、琉球の人々に対しては、彼らの王や内政、独自の習慣をそのままに残しておいた。しかし幾人かの官吏を日本から派遣して住まわせ、琉球の政府の国務を事実上管理下に置いたのである。琉球諸島ではどの島でも、中国の人々が入り込むのを固く禁じられていた。

琉球王国には16万人が住んでおり、26の島々に分かれて暮らしているが、その最も重要な島が大琉球あるいは沖縄島である。北緯26度に位置するこの島は、「沖縄」という日本名が示すように、長い紡錘のよう

な形をしており、全長50マイル、幅は平均して6、7マイルぐらいである。小さい山々が谷で断ち切れつつ続いているが、その高さは400メートルを超えることはない。山頂付近にもサンゴ礁の塊がしばしば見られ、この島が火山の隆起によって誕生したことの確たる証拠となっている。島の周りではイシサンゴの運動が変わらず続いているのである。その地理的位置と海風がたえず吹きつける環境のおかげで、沖縄の気温は極端に高いものにはならず、その温暖な気候は、詩人たちが称揚するような国々の気候の温和さに引けをとるものではない。沖縄では熱帯の植生と温帯地域の植生と交じり合うのが見られ、人々の目を楽しませている。檳榔<sup>びんろう</sup>や椰子、バナナの木の際には松やオレンジの木、竹やガジュマルの木々が見られるのだ。ソテツは自生し、サボテンが少なからず育つ風景はアフリカを想起させる。国全体が賞賛に値するほど文明化されており、中国や日本のどのような地方とも肩を並べるほどである。よく知られているように、農業は誇るべき水準に達している。さつまいもやタロイモは住民の食糧の基盤となっており、毎年収穫されるものの大半を、つまりかなりの量を消費することができる状況である。島にはまた幾分か水田も見られるが、数は多くない。茶やタバコの大規模な農園もあり、藍や野菜、小麦も生産している。さとうきびは国で余剰が出るほど採れる唯一の作物であり、この地域の砂糖産業は日本の商人たちを惹きつけるものとなった。さとうきびを積んで出港し、鹿児島に米や薪、タバコや茶を求めに行くのはジャンク船であったが、日本の会社「三菱」の蒸気船も参入しており、ときどき琉球にもその姿を見せることもあった。

王国の主要港である那覇は大琉球島の南西の端に位置している。サンゴ礁の帯が両脇に二つの水路があることを示しており、こういった地勢はよく小さな川に見られるものである。サンゴ礁は船が沖にいる際にも停泊できる唯一の避難所となっており、港のなかにも長い岬のように張り出して、海面に岩をいくつか突き出している。そのため港内の航行は容易ではなく、ごく限られた数の大型船のみを迎え入れることができるのである。港に近づくにつれ展開するパノラマは、非常に美しい風景の一つである。垂直にそそり立つ崖は下の方が海に浸食されて、涼やかで緑に満ちた河口部を城砦のように取り囲んでいる。その一角に那覇はあり、壁に取り巻かれた街で、その赤い瓦の屋根が広がっている様子は、われわれフランスのプロヴァンス地方の小さな街を思い起こさせる。二つ並んでいる埠頭の奥に係留している、中国風に建造されたジャンク船が、輝かしい赤みを帯びた船体や黄土色の帆を見せている。波は礁に打ちつけるが、そこには漁民が大勢みられ、貝をとるため、円錐形をした大きな帽子をかぶって体を動かしている。北側では、豊かな植生に覆われたこんもりとした高台が一つ、二つと果てしなく広がっている。その波は一番高いところで途切れていて、緑に囲まれた王国の首都・首里の家々、そして王城の壁を遠望させてくれる。海岸に沿って、高台の上に白い大きな染みが緑から浮き出ている。これは墓地なのである。

われわれが錨を下ろすとすぐに、土地の住民をいっぱい乗せた、二艘の横幅のある小舟が近づいてきて、われわれの招待に応じて艦上に上がってきた。一目見る分に、彼らの髪をじっくりと注意深く眺めるのでもなければ、彼らを日本人と思い込んでしまうだろう。実際には、日本人は靴や着物を着ていて、大きな袖をした着物はあまり着ていないのである。琉球人の髪は長くまたとても黒々しており、頭の上に巻き上げられ、かなり複雑な結び方でまとめられている。髪の手束は二本の銅の針で留められ、そのうちの一本の端は耳かきの形をしている。もう一本はカンザシと呼ばれ、端の方には単純な装飾として、同じ金属でできた小さな星がつけられている。彼らの礼儀深さは日本の住民のもの<sup>(1)</sup>と何ら遜色がない。彼らと言葉を交わして分かるこ

とは、われわれが使える少数の日本語の文例も無駄にはならないということである。

突然、訪問者たちは敏捷に姿を消し、小舟のなかに帰っていった。日本の旗を翻した大きな舟艇が近づいてきたのが、彼らをひどく狼狽させたのだ。そこから一人の日本人が出てきた。頭から足まできわめて折り目正しいヨーロッパ的服装をしており、琉球王国に在留する、江戸の政府からの使者を名乗っている。細面で知的な相貌をした若い男である。彼はわれわれに奉仕しに来たと申し出るとともに、われわれが何をしに来たのかを知ろうとする。この点については完全に安心したのか、われわれに対して琉球王国とその住民について詳細を伝えてくれるのだが、「琉球人はひどく遅れた貧しい島人であり、ヨーロッパ人を怖れているので、彼らから何か聞き出したいことがあるなら、媒介となる者を必ず通さなければならない」、とわれわれを説得しようとする。続けて、王〔尚泰王〕は長く病いに苦しんでおり、一時も住まいを離れられないのだと言う。アヤシ・タネモリ〔Ayashi Tanemori。但しフランス語ではhを読まないで、ハヤシ Hayashiが転記の結果変化した可能性もある〕というのがこの役人の名前で、明らかにわれわれに対して幾分か軽蔑する態度を示していたが、その後は、完璧な礼節ぶりを示していた。

彼が艦上を去ると、気づかれぬよう小型船を操っていた琉球人たちは、巡洋艦にとりついて再び船に上がってくる。そのなかの幾人かが、銀のカンザシからも確認されるのだが、頭であるという身分を明かした後に、われわれに水や卵、薪など、さまざまな物資を提供してくれた。そして、薩摩の一族がミカドの政府に対して武器をとったのは本当かと尋ねた。日本のくびきに苦しむ彼らに、はかない希望を打ち砕いてしまうような答えをするよりほかなかった。

琉球人男性が日本人男性を思い起こさせる可能性があるにしても、琉球人女性が日本人女性と共通している面はないと言ってよい。中国のように、高貴な階級の女性はあらゆる人々の視線からも隠れて生活を続けている。しかし庶民階級の女性はさまざまな仕事のほとんどに従事しているのである。琉球人女性はいつもの上着として、帯のない長い上っ張りを着ている。

髪の毛は男性の髪とほぼ同じようにまとめられているが、少しだらしない感じにしてい、頭の上で形作られる髪結びは男性のそれより豊かであり、たった一本の長い針で留められている。琉球人女性には手の甲に墨で、点や線を多かれ少なかれ規則的に配置した唐草模様を描く慣習がある。この文身は年齢が進むにつれさらに描き込まれていき、老女に至っては手の甲は真っ黒になっている。琉球人は日本の住民よりも肌が赤みを帯び、背が大きいようである。目はまっすぐで鼻は力強い形をしている。

この国の言葉は古い日本語で、現代日本語にもかなり近いものである。しかし文字は中国のもので、音節文字（仮名）を持たないようである。日本語は音節文字を導入することで、表意文字である漢字を自らの特性に合わせて用いることができたのだ。鹿児島に商いに行く大きなジャンク船は、つい最近、中国の沿岸地域に行ってきたそうで、中国風に建造、装飾されたものであった。船首の両側には象徴的な眼のようなものが付けられており〔発砲のために空けられ、後に装飾となった炮眼のこと〕、これがなくては中国の船乗りは航行の危険に突き当たってしまうのだろうか。一方、彼らが乗る釣り船は原始的なタイプのままである。木の幹の中をくりぬいて作ったカヌーのようなものであり、サンゴ礁の窪んだような小さなところにも入ることが可能である。琉球人の住まいはサンゴ分を含んだ石で建てられており、この石は国の至るところで削り出すことができる。屋根は半円筒形をした赤瓦でふかされており、住民自身で作っているようである。家屋の中にはござや仕切りが見られ、日本の家にいる感じがするが、外は完全に中国の田舎風の住宅様式を想起させるものである。石壁に囲まれており、家を覗こうとするような物見高い人々の視線からは、入り口を遮蔽する第二の壁によって完全に隠されている。街の道という道は、長く続く壁という特異な風景を見せてくれる。壁が空いている場所はあまり見られないが、その場所に見られるのは積み上げられたイシサンゴである。店は琉球ではその存在をほとんど知られておらず、人々が何か手に入れたい場合には、市場に行く必要がある。身分の低い者たちが住まう小屋はかなりみすばらしいものである。稲わらや麦わらなど、この従順な

者たちはすべて自分で調達して小屋を建てるのである。木材は琉球では大変稀である。鹿児島から輸入しているが、高価なため、それを使うのは身分の高い者たちの住居や寺院に限られる。

琉球人は仏教徒である。寺院は高い壁に囲まれており、遠くから見ると城砦に見える。門には二体の守り神であり、仏教における魔神である、雷神と風神が見られる。墓の大きさや豪華さは先祖を祀る信仰の深さを示すものである。先祖たちは中国の福建で見られるような様式、馬蹄形に象られていて、その中心の空いた部分から、墓の中心にある埋葬所へ入ることができる。死者はまず墓穴に埋められる。3年後、墓が開かれ、家族は骨を集める。それを骨壺に収めて、葬送の儀式は終了するのである。

橋はすべて石でできており、アーチは要石を中心に大きく湾曲し、橋台は頑丈そうである。

ラクロシュトリ号の艦長〔アンリ・リウニエ Henri Rieunier (1833-1918)〕は日本の役人のもとを訪ね、都である首里を訪問する約束をとりつけた。それは王の宰相と会見するためであった。というのも、王自身は〔病気で〕姿を見せていなかったからである。首里は島を縦断する山稜の一角を占め、那覇から一里だけ離れた場所にある。道はどこでも五、六メートルもの幅があり、舗装されていない所はなかった。いくつか小川を渡るが、かかっている橋は石造りの瀟洒なものである。その欄干には神話の登場人物を中国風に象った彫刻が見られ、すばらしい出来栄である。道の一部は松の並木道となっており、大きな賑わいを見せている。都を往来する者は多く、四、五尺の背の高さをした小型の馬も通っている。馬には農作物が積まれたり、人が乗っていたりするが、銀色のかんざしや首もとに差している扇によって貴族であることが分かる。

那覇を出ると、道の両脇には塩田が長く続く。左には、緑の丘を背にするかのように、泊という小さな村があり、柳の木々が所々で見られる。道の脇の木々の茂みの中には、ヨーロッパ人が幾人か、この地球の片隅で死を迎え、安らかな眠りにについている。この近くに、1846年から1848年にかけて、セシーユ提督に随行してカトリックを布教しに來た宣教師が眠っている。だが、彼らの敬虔な努力も空しく、薩摩の影響力



nois, assez bien exécutées. Elle est bordée de pins sur une partie de sa longueur et présente une grande animation; les piétons qui vont à la capitale ou en viennent sont nombreux, ainsi que les petits chevaux, hauts de quatre à cinq pieds, chargés des produits de la terre ou montés par des cavaliers que le kansachi en argent et l'éventail dans le cou font reconnaître pour des nobles.

Au sortir de Nafa, la route longe des salines assez étendues. Le petit village de Toumaï, qu'habitent les sauniers, s'étend sur notre gauche, adossé à une ondulation verdoyante; sous un des bouquets d'arbres qui l'environnent reposent quelques Européens surpris

par la mort dans ce coin perdu du globe. Ce fut près de là aussi que résida, de 1846 à 1848, une mission catholique amenée par l'amiral Cécille et dont les pieux efforts ne purent lutter contre l'influence de Satsuma.

Bientôt nous dépassons une muraille massive et profonde percée de trois petites portes et ensevelie sous un bouquet d'arbres où, sur le vert ardent de la nature tropicale, d'énormes érythrines font éclater leurs belles fleurs rouges et les bambous agitent leur feuillage aérien. Cette muraille enclôt un lieu célèbre dans l'histoire du pays, appelé Sinfouji : c'était là que, jadis, les ministres du roi venaient recevoir les présents apportés de loin en loin par des ambassades



Sinfouji. — Une route aux Lou-Tchou. — Dessin de G. Vuillier, d'après une photographie de M. J. Revertgat.

de la cour de Pékin; aujourd'hui le monument est devenu une bonzerie.

La route aboutit au pied de la hauteur de deux cents mètres au sommet de laquelle s'élève Shiuri. A mesure qu'on s'élève, la vue s'étend sur un ravissant paysage doucement ondulé et couvert de vertes cultures, et la beauté de cette riante campagne fait qu'on arrive sans trop de fatigue à un arc chinois, de vastes proportions, à angles de toiture relevés, qui marque l'entrée de la ville. Deux personnages qui remplissaient évidemment les fonctions d'introducteurs nous y attendaient et nous conduisirent dans une maison voisine, où l'on nous servit du thé selon l'étiquette de la cour.

Cette formalité remplie, nous continuons notre route; l'avenue s'élargit, bordée de murs et de bois de haute futaie; les groupes de curieux deviennent nombreux; les hommes ont le courage de regarder en face les terribles étrangers; mais dès qu'on lève les yeux sur une femme, elle prend la fuite.

Bientôt les murs qui bordent l'avenue s'élèvent; nous passons deux nouveaux portails et nous voici en face d'une immense construction de murailles superposées, de portes en retrait, auxquelles aboutissent de longs et larges escaliers, de toits saillants surmontés de pavillons dont les angles relevés déchirent le ciel. Deux énormes chimères en pierre gardent l'entrée

図1 「崇元寺石門—琉球の道—写真をもとにした G. ヴュイイエのデッサン」。以降、挿絵については著者の「写真をもとにした」ことが言及されている。

に抗し切ることはできなかった。

そうこうするうちに、われわれは巨大な壁を通りすぎたが、非常に厚いものであった。壁には三つの小さな門があるが、生い茂る木々に埋もれているかのようである。熱帯の植物の濃い緑を背景に、大きなデイゴがその美しい赤い花を輝かせている。竹はその空気のように軽やかな葉を震わせている。この壁は、琉球の歴史において有名な場所を囲む壁のようである。崇元寺〔この紀行文では Sinfouji と書かれているが、艦長の曾孫に残された手記では Son-ngen-djé〕と呼ばれる場所で、かつて王の大臣たちが北京の宮廷の大使〔冊封使〕たちから遠路はるばる届けられた贈り物を受け取りに来た場所である。今日ではこの地は仏教の寺となっている。

道は上り坂となり、海拔二百メートルに達する。その頂に首里城がそびえ立っている。道を上っていくにつれて、眼の前には魅惑的な光景が広がっていく。穏やかに波打つように、植物の緑に覆われた城である。この目に心地よい田園の美しい光景は、その巨大さ、屋根の曲線が反り返る姿から、都市を囲む中国のアーチ状の城壁を想起させるのに十分である。案内の役目

を果たしに来たのだろう、二人の人物がわれわれの到着を待っていて、近隣の館へと連れていく。そこでは宮廷の作法にのっとって茶を出された。この儀礼を終えると、さらに城へと歩を進めることとなる。道は広くなり、壁や背の高い樹々が道の両側に現れ始める。物見高い人々の集団が増えはじめ、臆することなく、奇妙な外国人のことをまじまじと見つめてくる。とはいえ、こちらの方でも一人の女性に視線を投げると、彼女は逃げてしまったのだが。

そうこうするうちに、道の両脇にある壁がさらにせり上がっていく。新しく二つ門をくぐると、巨大な城壁が折り重なっているような構築物に突き当たった。奥まったところに城門があり、そこから長く幅広の階段が延びている。別館を覆うように張り出した屋根がまた別の屋根と作り出す、反り返るような稜線は天を引き裂くかのようなものである。正門〔歓会門〕の入り口は二体の巨大な石造のキマイラ〔シーサー、石獅子〕に守護されている。そこを入ると、四十段の階段をのぼった頂のその先に門〔瑞泉門〕が立ちはだかる。自然もまた壮大な装飾を添えている。巨大なソテツが城の立つ斜面に至るところ覆っており、何百年もの樹齢を誇



図2 「琉球の王城―漏刻門―写真をもとにした G. ヴェイイエのデッサン」(挿絵に描かれているのはおそらく瑞泉門。挿絵のもととなった写真が、艦長の子孫エルヴェ・ベルナールのコレクションに残されている)



ような木々が丘の起伏に沿ってそびえている。王宮の天辺の上方に輝く太陽に向かって、手を伸ばそうとしているかのようである。今、われわれの前で開かれた門は「時の門〔漏刻門〕」と呼ばれている。というのも、かなり古びているが、王領の時間をつかさどる日時計のある中庭に通じる門だからである。日時計が立つ石の台座からは、都に向かって眺望が広がっている。人口は二万人にすぎないと言われているが、木々に囲まれた中に集落が散在していることを考えれば、集落の中では人々が折り重なるようにして生きていることが想像される。

もう二つ門を通して、私たちはようやく宮殿前庭〔御庭<sup>うなご</sup>〕にたどりついた。その奥に正殿がそびえているのだが、木造の巨大な長方形の建造物といったところである。しっかりと設えられた土台の上にそびえ、前方には日本の寺院の中に見られるように柱廊が整然と伸びている。木柱で支えられているのは巨大な屋根であり、われわれに向かって張り出してきている。屋根がおりなす稜線の両端には、彩色された龍の二つの巨大な頭が輝いている。建物の本体を取り巻いているのは、木工細工をされた板であり、聖獣や仏教の天上

界のさまざまな女神たちが浮き彫りにされている。ほぞ穴や穹窿のアーチ型曲線、張り出した部分などは、日本風に彩色された唐草模様によって引き立たせられたものとなっている。前庭には赤い石畳が敷かれている。その周囲を取り囲むのは、正殿に次ぐ地位の建築物の数々で、使者を応接したり宮廷の官僚が控える場所として使われているようである。正殿については、われわれを迎えてくれた者たちが「お寺」と呼んでいるように大きな寺院であるが、ネズミ一匹入れない空間となっている。壮大な儀式の際にしか開けられないからであり、王はそれに隣接する建物に住んでいる。王を垣間見ることさえできないのである。

われわれは正殿の横にある応接の間〔西殿=現在の北殿〕に参上を許された。赤地に黄金色の漢字で書かれているところによれば、「清涼の間」と呼ばれる場所のようである。南に向いた間取りによって、夏中、そよ風が部屋に入ってくるようになっているというのが、その名の由来ということだ。小さな卓が左右対称に配置され、その一つ一つに茶や、小麦や米でできた菓子が置いてある。卓の周りにある椅子は中国風である。部屋の四方に置かれた中国の屏風は、長い歳月を



Le château royal à Shiuri. — Dessin de G. Vuillier, d'après une photographie de M. J. Revertegat.

図3 「首里城—J・ルヴェルトガ氏の写真をもとにしたG. ヴュイイエのデッサン」

経てきたことが幾つもの傷からうかがえる。部屋の天井からは、黒地の絹糸で織られた布が垂れ下げられている。その上には白く、琉球人の王が持つ武器が浮かび上がっている。床にはござが敷かれている。

われわれが着くとほぼ同時に物奉行〔宰相に当たる役職〕が現れたが、年のころ六十の老人のような相貌である。士官が幾人か随行しており、皆が席に着く。懇談がお決まりの社交辞令とともに始まり、茶がつぎ直されるたび話は中断する。これが極東の礼儀作法では期待されるところだろうか。われわれの艦長は今回の訪問の目的を伝え、王に対面がかなわなかったことを残念に思うと告げる。そして物奉行に訪問名刺を渡

し、王にそれを手渡すことを願い出た。物奉行は屏風の後ろに消えたかと思うと、この小芝居が前もって仕組まれたもののようには思わせないためなのか、すぐに戻ってきて、明日、王が船に運ばせる贈答品のリストを示す。五十羽の雌鶏、二百個の卵、二束の野菜、二袋のサツマイモをくださるという。

われわれはまた宮殿前庭〔御庭〕を横切って、王の取り巻きの人々の中を歩いていく。領国には二千の氏族がいるとのことだが、皆代表を出して、宮廷に参上したいと考えているのである。

かつて琉球では日本のように、貴族は剣を二本差し



図4 「琉球人たち—写真をもとにした G. ヴュイイエのデッサン」

ていた。薩摩による征服の際、この特権は剥奪され、階級を示すものとしては銀のかんざしと平和的でしかない扇だけが残されたのである。今日、日本の古くからの藩のように、貴族たちは米やサツマイモといった、現物支給を受けており、王家の収入から出ているものであった。その収入額は、王国の総生産の約10分の3にまで上るものであり、国家のさまざまな税からあまねくとられたものである。

日本の役人が無作法にもわれわれに教えるところでは、琉球国の支配者である尚泰王は、彼の年齢と同じ数だけ、つまり36人の女性を囲っていたとのことである。しかし3人しか子供がおらず、一人は娘、二人は息子で、その長男は18歳になるという。王家の家族の全体については、王も含めて、日本の役人には分からないとのことである。

首里城が建てられたのは500年前、王国の繁栄期であり、琉球のジャンク船がマレー半島まで貿易を行いにいていた時代であったが、非常に素晴らしい建築の一つと言えるだろう。城を囲む庭園はその様式の荘厳さと見事に調和している。高くそびえる樹林に分け入れば、名高い比喩で語るなら、光が木々によって濾過されて届かない、いわば闇の空間を見せてくれる。大きな<sup>つた</sup>蔦や<sup>つらゆ</sup>蔓が絡み合い、苔むした木々の幹にレースをかけるかのようである。舗石が敷かれた小道は、竹や松、バナナの木や月桂樹の茂みで覆い隠され、神秘的なたたずまいである。そうこうするうちに、閑けさが支配する窪地の底に降り、蓮に覆われた小さな池を見つける。池には寺院の宝石ともいふべき、典雅な小堂のある島が見え、そこに行くのに小さな橋を渡るが、そのなめらかで優美な曲線は、周囲を取り巻く迫力のある自然を背景にして、美しく浮かび上がっている。この甘美な御堂は、人間の手によって繊細なタッチが加えられたもので、「カンノン」という神に捧げられた場所となっている。観音は日本人の言う弁天を指し、調和と海の神であると同時に、漁民の守護者でもあり、仏教の世界観において最も詩的な形象と言ってよいだろう。琉球王国は海によって地理的に守られた位置にあり、宮殿の壁掛けに見られる王の武具も、他ならず、日本では愛らしいとされる観音を象徴として採り入れた武具となっているのである。

首里の街は王家の住まいである城を中心として、隣接する高台に広がっている。その道は那覇の道と同様に、越えられないような壁が長く続いているのである。市場は汚く貧相な様子であるが、開け放たれたように大きく広がった広場で行われている。女性がいっぱい詰めかけているが、馬もひしめき合っている。売られているのはとりわけ、サツマイモ、茶、タバコ、さとうきびが切り分けられたもの、布、そして帽子である。

翌日、物奉行はたくさんの従者を連れて、われわれの船を訪問した。彼の前で大砲を一発撃つとたいそう驚愕し、この恐ろしい武器に点火する引き縄をつかむこともできかねるようだった。一方、艦内の設備にはどこもかしこも強い関心を抱いた模様である。彼には軽い食事を出したが、天上のご馳走であるかのように気に入った様子である。王からの贈り物への返礼として、さまざまな種類のワインを王に贈るように物奉行にお願いした際、彼の顔からは喜びが溢れ出していた。このワインによって、王もその家族も、日本人が王領を完全に帝国の一地方にしてしまう機会を虎視眈々と狙っているという恐怖を、ひとときでも忘れることができるのではなかろうか。王もまた旧藩主と同様、江戸に留め置かれることになるのだろうか。

#### 【解題】

ここに訳出したのは、Jules Reverteat, “Une visite aux îles Lou-Tchou, 1877”, *Le Tour du monde* (Paris), XLIV, 2, 1882, pp. 250-256 である（〔 〕内は訳者による注記）。今回この琉球紀行文を全訳するに先立って、『沖縄タイムス』紙上で、解説とともにその部分訳を紹介する機会に恵まれた。<sup>(2)</sup> 翻訳のきっかけと新聞紙上での発表の仲立ちをしてくださった後田多敦氏、編集を担当してくださった沖縄タイムス社学芸部の内間健氏、編集局首里城取材班の城間有氏に感謝申し上げます。また訳文はじめ、訳注や解題について記事内容と重複する箇所があることをお断りしておく。

本紀行文、とりわけそこで挿絵として掲載されている首里城の大龍柱が正面を向いていることについては、本誌に掲載されている後田多敦氏の論文を参照して<sup>(3)</sup> いただきたい。



『世界一周 *Le Tour du monde*』誌は、1860 年にエドゥアール・シャルトンによって創刊された旅行記・探検記を主題とした雑誌で、現在の『ナショナルジオグラフィック』誌の元祖と言えるような雑誌である<sup>(4)</sup>。紀行文だけでなく図版がふんだんに取り入れられた誌面構成で知られ、著名な芸術家であるギュスターヴ・ドレも図版制作に参加している。図版は木口木版により制作されたが、その多くは写真をもとにしたものであった。写真と文章を同じ誌面で印刷する網版印刷の技術が開発される前は、写真をそのまま印刷にかけることができないために版画におこされることが多く、この紀行文に掲載されている首里城の図版も、その例にもれずもととなった写真が存在していた。

ジュール・ルヴェルトガ (Jules Revertégat。Revertégat という表記も見られ、その場合は「ルヴェルテガ」となる) について、詳しいことは知られていない。巡洋艦ラクロシュトリ号の艦長、アンリ・リウニエの曾孫エルヴェ・ベルナール氏が所有する「ラクロシュトリ号、1878 年 4 月 13 日にシェルブール港に寄港」という文章によれば、ルヴェルトガは 1850 年に生まれ、1866 年に海軍に入り、1871 年に海軍少尉、1878 年に海軍中尉に昇進したとされるので、来琉時は海軍少尉となる。リウニエ艦長のもとで長年任務に服し、1875 年 7 月 25 日に、32 か月の極東地域 (中国・日本) の巡洋に向けてシェルブール港を出発する。ルヴェルトガは日本語を解するとされ、通訳として艦長に随行した。また訪問地についてのメモや写真による記録も担当し、今回の琉球訪問において、首里城最古の写真を撮影したとされる。最後は海軍大佐まで昇りつめレジオン・ドヌール勲章を受け、1912 年に生涯を閉じた。<sup>(5)</sup>

エルヴェ・ベルナール氏は航海日誌や書簡、未発表の写真や政府への報告など、貴重な資料を保有している。彼が艦長の手帖から書き起こした文書も参照することで、首里城の写真撮影に至った経緯も確認することができる。<sup>(6)</sup>

ルヴェルトガの琉球滞在を日程順に追っていこう。1877 年 5 月 13 日、紀行文に示されているようにラクロシュトリ号は那覇港に着岸するが、日本の内務省出張所からの役人からの視察を受けた後、日本人に気づかれぬよう船に忍び込んだ琉球人たちによって、西南

戦争の情勢について尋ねられたようである。子孫がまとめた手記によるならば、「二人が何としても聞きだしたかったのは九州の情報であり、昨今の反乱の指導者となった前の元帥、西郷隆盛のことである。われわれの答えは彼らを狼狽させるもので、彼らは心から反乱者たちに共感しているようであった」。彼らは拙い英語を話すとされ、首里城訪問の際には通訳として登場することから、琉球王朝が日本の政治状況の趨勢に敏感であったことがうかがえる。

翌 5 月 14 日、日本の内務省 (出張所) を訪問する。尚泰王が病気であることを伝えられるが、手記によれば、フランス人たちがそれでも首里城を訪問することを言うと、随行したい旨伝えられたようである。「アヤシ (ハヤシ)・タネモリ」がどのような人物であるのかは同定できなかった。

ルヴェルトガの紀行文では、首里城訪問の記述の前に、琉球人の外見や言語、習俗についての考察が見られる。中でも興味深いのは宗教や葬送に対する言及である。こうした記述は聞き書きである可能性もあるが、帰仏後に研究書を参照したものかもしれない。

15 日、首里城訪問の日である。内務省 (出張所) は駕籠を用意していたが、リウニエ艦長、ルヴェルトガをはじめとする総勢 8 名の一行は歩いていくこととしたようである。那覇から泊の方へ向かうが、泊では 1846 年から 1848 年にかけて琉球を訪問したセシーユ提督に随行した宣教師たちの墓地について想起している。実際、泊には外人墓地があり、フランス人宣教師、マチウ・アドネ (1813-1848) の墓が今もなお残る。

道中、彼らは崇元寺にも注目しており、紀行文の挿絵においても、「三つの小さな門がある」寺のたたずまいが描かれている。

とうとう首里城が見えてくる。物見高い人々に見つめられながら、一行の前には城門が次々と現れる。歓会門、瑞泉門、漏刻門をくぐり抜け、一行は宮殿前庭、すなわち御庭<sup>うなご</sup>にたどりつく。正殿の屋根の上に龍が輝くのを仰ぎ見た後、一行は「正殿の横にある応接の間である西殿に参上を許された」とあるが、西殿は現在の北殿にあたる建物となる。

病気の王の代わりに物奉行と会見し、紀行文に見るように贈り物をいただくのだが、艦長の子孫ベルナー

ル氏によってまとめられた艦長の手記にはその続きがある。「私は物奉行に、皆さんを連れてラクロシュトリ号を訪れてくださいと伝えた。申し出は快諾された。そのうえ、翌日にルヴェルトガ中尉が首里城と都の様子を撮影することも、許可していただいた。彼を迎えた役人たちは、さまざまに注意しながら写真撮影に同行し、感じのよい態度ではあった。が、日本の内務省(出張所)の副長と二人の警官の存在は、写真を撮影する立場としては大変都合が良かったものの、琉球の庶民にとっては気づまりなものであった<sup>(8)</sup>だろう」。訪問当日は王の取り巻きの人々が多くいたという記述があるのに、正殿を写した写真に琉球の人々が見られないのは、こうした事情に起因するのかもしれない。

翌16日午前、物奉行一行は礼品を届けに、ラクロシュトリ号を訪問する。返礼としてのワインの贈呈の記述は、琉球王国の滅亡を予感させるものであり、ここで紀行文は終わりを告げる。ルヴェルトガは物奉行たちを送りがてら首里城へ同行し、沿道や首里城の撮影を行ったのだろうか。

18日、ラクロシュトリ号は那覇を出港し、中国・福建を経由して、1878年4月13日にフランス・シェルブール港に帰着した。ルヴェルトガの紀行文は1882年に発表されるが、1879年の尚泰王の首里城明け渡しと東京連行という、琉球処分の結果を知ったうえで、紀行文の末尾が書かれたのかは分からない。

この琉球王朝末期のフランス人訪問については、琉球側の資料においても確認されている。2020年11月22日に行われた「首里城再興に関する公開討論会」において、高良倉吉氏は尚家文書「御書院日記」に、首里城訪問と写真撮影をしたと考えられる1877年5月15日・16日と同時期に、2日連続で仏人一行が首里城を訪問したことが記されていることを紹介している<sup>(9)</sup>。

最後に、このルヴェルトガの紀行文は、森田孟進氏が琉球大学附属図書館報『びぶろお』において、「Le Tour du Monde (「世界一周旅行」) シリーズと M. J. Revertégat(ルヴェルトガ): “Une Visite aux îles Lou-Tchou”(琉球諸島紀行)」と題された連載で紹介、一部翻訳している<sup>(10)</sup>。今回の翻訳でも参考にさせていただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。今回の報告

ではそれを、首里城訪問の全体を訳し、艦長の子孫、エルヴェ・ベルナル氏による艦長の手記の書き起こしで補足することで、新情報を提供しようと試みた。森田氏自身、「フランスの海軍関係文書の中に琉球に関する記録が数多く見いだされる可能性がある」としており、その一端をここに日本語で示すことができたと思えば、幸いである。

## 註

- (1) [原注] これは貴族たちの髪型である。他の琉球人の髪型は、ひどく無造作なものである。
- (2) 「王朝末期の琉球活写」「1877年の首里城訪問—フランス人が見た琉球」(上)(中)(下)『沖縄タイムス』2020年11月16日、20日—22日。
- (3) 次も参照。後田多敦「確認された首里城最古の写真」『沖縄タイムス』2020年11月26日、「ルヴェルトガの正殿写真」『琉球新報』2020年12月1日。
- (4) Jean-Pierre Bacot, *La presse illustrée au XIX<sup>e</sup> siècle : une histoire oubliée*, Limoges, PULIM, 2005, pp. 95-98.
- (5) ちなみに『蝶々夫人』のもとになった『お菊さん』の作者、ピエール・ロチも彼の部下の一人である。
- (6) “Le Laclocheterie est de retour à Cherbourg, le 13 avril 1878” <http://ecole.nav.traditions.free.fr/pdf/Revertégat.pdf>
- (7) Hervé Bernard, “Visite historique d’un bâtiment de la marine française dans le petit royaume tropical des îles Ryūkyū en mai 1877”, *Neptunia*, no 260, 2010, pp. 33-40.『ネプチュニア』誌は、フランス国立海軍博物館友の会により1946年以来、年4回刊行されてきた長い歴史を誇る雑誌で、2021年3月時点で301号発行されている。海軍の歴史や文化、博物館に収蔵されているものに関連した情報をさかんに提供している。
- (8) *Ibid.*, pp. 39-40.
- (9) 「大龍柱向き再検討へ 首里城討論会 復元委・高良氏が言及」『琉球新報』2020年11月23日。
- (10) 『びぶろお(琉球大学附属図書館報)』24巻1号、同2号、同4号、25巻1号、同2号、1991-92年。